

昭和55年7月1日第1種郵便物認可
平成16年8月1日発行(毎月1回1日発行)
俳句雑誌 沖 第35巻第8号

俳句雑誌「おき」

沖

8月号

沖
発行所

万緑叢中

林 翔

句集『光年』

未刊第七句集『光年』の再校を了えた。前句集『あるがまま』以後、つまり平成九年（一九九七）以後の作品を収めた句集である。

光年とは天文学の上で光が一年間に進む距離のことだから、大袈裟すぎるかな？と多少気にはなったが、「沖」平成九年二月号に載せた句、

光年の中の瞬の身初日燃ゆ
よつて名付けたわけである。

私も九十歳だから、これが最後の句集である。仮に百歳近くまで生き得たとしても、『光年』以後の句を一書に纏めるつもりは無い。

昨年十一月号の随想に書いた通り私には老いの歎きの句は全く無い。このことは歌人篠弘氏も認めて「長寿の若さ」という題の文章で褒めて下さっている。

老いの歎きの句ではないが、やや自嘲的な句としては、
われも亦色なきをとこ秋の風

風のそよぎ 吾が身の喘ぎ 万緑裡
万緑裡 恥ぢらふごと き嫩葉あり

知らぬ間に出てぬし素肌いとしけれ

六月六日

腕さすりさすりて止まらず 今日梅雨入

六月二十八日

宇涯忌や閃き付けの梅雨晴間

お酒落忘れし野良猫に梅雨深むかな

萼割つて紅ほとばしる薔薇薔

黄の薔薇は男の薔薇か蕊ふかく

美しき夜蜘蛛に悔いぬ追はずとも

病葉の妖しき色に見惚れけり

がある。秋風を「色なき風」とも言うところから、もう色気がなくなつた年齢を自嘲したわけである。

『光年』は「ふらんす堂」から出版されるのだが、ふらんす堂から依頼された『光年』10句選を掲げる。

光年の中の瞬の身初日燃ゆ

振滑る泳ぎ子に「今」が流動す

やはらかに生き熱く生き雑煮餅

草の絮飛んで未来を創るかな

夜の風鈴月の言葉と言ひつべく

ふと踏んで瞬の童心霜柱

われも亦色なきをとこ秋の風

打水や石への愛は日に一度

耳鳴りは宇宙の音か月冴ゆる

この若き心を映せ冬鏡

林 翔



貝風鈴

能村 研三

井上ひさし先生

勤務日の七曜淡し朝ぐもり

捨てられぬ我執のありて日焼せり

セロ弾きの巨体を屈め夜の秋

今はもう海は見えずに貝風鈴

七月一日、市川駅の改札口で井上ひさし先生を待つていた。予め電話で約束していた快速電車からは、こまつ座の高林さんが降りて来られた。井上先生も一緒に思っていたが、結局間に合わなかった。高林さんも、ここで芝居の台本を受け取ることになっているというので一緒に待つことにした。

三月に三日間連続の文章講座をしていた時、同じように市川駅で出迎えたので、遅れて来られるのは覚悟していたが、一電車遅れただけで、階段から降りて来られぼつとした。

この日は、井上先生が私の勤務する市川市文化振興財団の理事長に就任される日、市長から辞令の交付式が行われることになっていた。

井上先生は、かつて二十年近く市川に住んでおられた。昨年の「市民文化賞」を受賞されたのを機に、市民からも井上先生が市川に関わっていたことを熱望する声が起こってきた。

ロケ隊のごときしぐさの作り雨

蜘蛛の囿に微酔の顔を捉へらる

情報の流出蜘蛛の囿は密に

箱眼鏡向ひの舟の波かぶり

箱庭を緻密に作り凡夫なり

箱庭の写実すぎたる虚しさや

先生が就任されるまでには、私も「おっかけ」状態で、ペンクラブの懇親会でお話をいただく機会を伺ったり、浅草の木馬亭での浪曲の会まで講演されると聞いてそこへ行ったりもした。

井上先生が財団理事長に就任下さったことがまだ夢のようでもある。先生は、機会を得て文章講座や戯曲講座の他、「遅筆堂文庫」のある山形県川西町や館長をお務めの「仙台文学館」と連携して、蔵書を市川でも見られるようなネットワークシステムを作りたいとその思いを述べられている。

市川は、永井荷風や水木洋子の終焉の地であるにもかかわらず、文学館がない。そういった面でも井上先生のお力に期待するものは大きい。私にとって財団理事長としての、井上先生との関係を得られたことは、役所の仕事だけでなく、私の生涯にとっても、大きな潤いとなりそうだ。

能村研三



蒼茫集



竹皮を脱ぐ

松本圭司

竹皮を脱ぎしばかりの勇み肌
鬱々の日に胸張れと蟬鳴けり
今年また丁寧に拭く古すだれ
尺蠖の歩みをわれの歩みとす
時間だと言はれたやうな昼寝覚
梅雨長く己に少し倦みてをり

山の夜明け

田所節子

切株のテールブルへまづ紋黄蝶
足弱の我まくなぎに好かれをり
樺・落葉松五月の池はモネの画布
老鶯に口笛合はせ山路ゆく
登山杖またしても子に待たれぬ
ほととぎす山の夜明けを告げてをり

外かまど

酒本八重

睡蓮の旺んは水を押し上ぐる
いま剪らばしぶきとならむ花菖蒲
三笠艦見たしと父の日の父は
籐寝椅子児が来ればすぐ子供用
ひき抜きて竹串にある鮎の塩
麦秋の火のあそびぬる外かまど

緑 雨

渕上千津

思惟仏と邪鬼にもまみえ奈良緑雨
円空仏鑿の省略あと涼し
普陀落し師在り弘法麦熟る
突堤に流砂をとどめ大南風
海霧ごめに艦影憩ふ遠嶺富士
晩学と言はじ野生の枇杷たわわ

潮鳴集

立夏 福山 広秋

数ふれば飾りし武具も八十路坂
重さある風送りきし藤の花
水も火と燃ゆる川面や鵜飼船
それ以後は細長きもの蝮かと
胡麻妙れば自在に跳ぬる立夏かな

夏帽子 望月 晴美

目に入りてまくなぎ不運われもまた
波寄するごとく風くる野萱草
木道の木の香あたらし水芭蕉
一合の梅雨の重みの米をとぐ
夏帽子並びあるきし夫はるか

青年期 坂本 京子

早苗田やささなみの綺羅ゆきわたり
山蟻の黒ぐるる汝は青年期



睡蓮の白のとりりと隠り沼
せせらぎに耳を大きく海芋かな
ねむごろに鷺の関する植田原

田植餅 広瀬 長雄

粒餡は能登大納言田植餅
植田早や根付きて風に逆らへる
五月雨や今日も欠かせぬ昼の酒
打ち減りし魚板の疵や青葉冷
夏兆す外人多き漁師町

今年竹 高橋 あさの

万緑やかはらけ思ひ切り抛り
竹林は日矢もみどりよ梅雨晴るる
今年竹子に初めての「俺」ことば
梅漬や古甕の艶いとほし
み梅雨の雷蟄居のごとく座してをり

沖作品



能村研三選

浪の綺羅植田のきらや九十九里
サーファーの乗つて吞まれて波しぶく

石川 廣島 泰三

夏掛のふはり浅黄の旅枕
まなかひに潮目押し出す青岬
「なめらう」に乾杯九十九里五月
ふくろふの森に夜のきて祭笛
捧げ運ぶ一艇の栄雲の峰
癒したき嘴あらむ泉湧く
山下りて終の一步の茅の輪かな
号外のたちまち古びジャガーデン
春惜しみつつ千夜一夜の国憂ふ
大南風九十九里浜撓ひけり
引く潮に足をからませ夏はじめ
母の日を妻の日として赤ワイン
鰯口のにぶき響や走り梅雨

千葉 坂 ようこ

茨城 内山 照久

太古よりの森の匂にしたたれり
人を見る眸のまつすぐに袋角
麦秋や血流止まるほど眠り
九十九里弧のゆるやかに卯波たつ
海を見るための夏帽新しく
風薫る棚田千枚水足りて
紀州へとつながる安房や青葉潮
サーファーの雄ごころ試す波来たる
蟻走る宝物殿の大鉄扉
荒梅雨や土塁を噛んで椎大樹
さよりさより波のほつれ目縫ふやうや
貝寄風や胸奥の洩波立ちぬ
生れてすぐ風のころも糸とんぼ
早苗待つ千枚の田に日を嵌めて
絵硝子の青き鳥翔く夏館

石川 内山 花葉

千葉 諸岡 和子

茨城 工藤 進

卯波さへゆりかごとせむ真珠貝
中尾 公彦

海原の孤愁を曳きて海ほぼつき
目の力抜き万緑の香を聞けり
潮の香のゆきわたりたる夏館
和製ロック茅花流しに梳かれをり
白焼の穴子に強氣揃ひけり
今瀬 一博

黒楽の底光りして走り梅雨
一山を傘にをさめて椎の花
秒針の銀のまばたき風五月
緑さす碑文たどれば潮匂ふ
福嶋千代子

まなうらに山河のありて粽解く
潮の道かはりて筍流しかな
サーファアの膝やはらかに立ち上がる
千葉 佐々木よし子

房州に結ひの名残や田を植うる
チエリストの二の腕白し夏はじめ
本降りの雨や浮巢の揺れどほし
夕焼や寝姿多き安房の山
小松 誠一

こそばゆし跣足で巡る砂利回廊
望外の嵩に戸惑ふ蕨採り
共に来て別々に植う棚田かな
市川市 栗原 公子

臙夜や螺鈿の匣のうすぐもり
葉桜を透かし丹の古る五重塔
麦の穂の振ればかそけき音に鳴る
パセリ噛む皮肉言ひたき口閉ざし
山形 板坂 道子

牡丹のほとりに放つひかりかな
雨あとの若葉の色のきはまりぬ
若葉なる百樹の森の深呼吸
胸元に来てひるがへり夏つばめ
鈴掛 穂
鉄塔の影くつきりと代田澄む
噴水の林立空を押し上げて
植糸終へし棚田に千の夕日かな
深田 稚敏
釣りあげし荒瀬の鮎の飛沫かな
風がすき宙に反転夏つばめ
万緑にのまれて電車くらくらなり

新人賞予選句（八月）

サーファアの乗つて吞まれて波しぶく
号外のたちまち古びビヤガーデン
廣島 泰三
春惜しみつつ千夜一夜の国憂ふ
坂 ようこ
太古よりの森の匂にしたたれり
内山 照久
蟻走る宝物殿の大鉄扉
内山 花葉
さよりさより波のほつれ目縫ふやうや
諸岡 和子
目の力抜き万緑の香を聞けり
工藤 進
白焼の穴子に強氣揃ひけり
中尾 公彦
まなうらに山河のありて粽解く
今瀬 一博
房州に結ひの名残や田を植うる
福嶋千代子
佐々木よし子

沖作品 選後句評

*
能村研三

サーファーの乗つて吞まれて波しぶく 廣島 泰三

今月の作品には、五月に行われた「九十九里勉強会」での収穫作品が多く投句されているが、この廣島さんの句も、九十九里のサーファーを詠んだもの。サーファーや波乗りの句は今回の勉強会では素材として多くの方が挑戦しようだが、この句は正にあの時の状況を的確に捉えた成功句である。中七の「乗つて吞まれて」と息もつかせぬような畳み掛けが、太平洋の荒波とその速さに呼応している。サーファーの一举一動をつぶさに観察し、その時間的な経過を一句の中でまとめあげた。もう一句の「浪の綺羅植田のきらや九十九里」の句も、九十九里を大景的に捉えた句だが、勉強会が行われた五月の中ごろの田植えを終えたばかりの様子がうまく捉えられている。

号外のたちまち古びビヤガーデン 坂 ようこ

今年は、イラクの人質事件や北朝鮮の拉致被害者の家族の帰

還など大きなニュースがたくさんあって、その度に町では号外が配られた。インターネットなど情報のあり方も急速に変化しているが、新聞社による号外だけは、昔と変わらない。しかし、受け取る側の市民の意識は、こういった大きなニュースに慣らされてしまったのか、配られた時は驚きをもつものの、少し時間が経つとその情報はすでに古びてしまうのだ。ビアードンという、世間の時事事項とはかけ離れた空間では、人々の中では昔ほど真摯に受け止めなくなったのも何か寂しい。もう一句の「捧げ運ぶ一艇の米雲の峰」の句、大学のボート部によるレガッタであろうか。優勝の喜びを全員で祝っている様子がかがえる。

春惜しみつつ千夜一夜の国憂ふ 内山 照久

この句は、九十九里勉強会の事前投句の私の特選句である。千夜一夜の国というと、現在戦火が絶えない中東の国、イラクやイスラエルを思い浮かべる。「千夜一夜物語」は、シエラレオンドという才女が面白い話を千夜一夜にわたって語りつづけるものであるが、私たち日本人には中東の国々については、この物語からの知識しかなかった。今でこそ自衛隊が駐留する国として身近に感じられるようになったが、まだまだ日本人にはこれらの国に対して一定の距離がある。「春惜しむ」という季語は、日本人ならではの季語であり、この季語を通して、中東の戦火を憂いているのだ。もう一句「母の日を妻の日として赤ワイン」の句、近頃内山さんは、同居されていた義母を亡くされたが、もういない母を偲び、その分妻を大事にする気持ちが増したのだろう。